

柴 宜弘氏追悼

三谷 博（東京大学名誉教授）

ホルバートさんからメールをいただき、柴宜弘さんの逝去を知ったとき、しばらくは我が眼が信じられなかった。昨年1月に東大駒場地域文化研究専攻の教員同窓会でお目にかかったときは元気そのものだったからである。同じテーブルに対座し、いつもながらの優しい眼差しを浴びながら話し、近刊の書を見せたら是非にと請われて、あとで一冊を贈呈した。近い将来、以前と同様に、東欧の料理を食べながら酒杯を傾けられるに違いないと思っていた。私はその直後、甲状腺癌が発覚して手術をしたが、幸いに悪化はそれで止まり、今は元気になっている。お年頃で、いつどこがおかしくなっても不思議でないが、それが致命傷となることはあるまいと思っていたので、柴さんの急逝には驚いてしまった。

柴さんとの付き合いは、彼が東大駒場の中で語学から人文学の部門へ移動してきた頃から始まった。初めは親しくなかったが、私が2009年に、互いの同僚だった中国史の並木頼寿さんらと『大人のための近現代史一九世紀編』（東京大学出版会）、大学生向けの日中韓三国史を刊行したのに目を付けてくれたのだろう、翌年に、スロヴェニアの歴史家たちと始めた歴史教科書の比較研究に誘ってくれた。東欧の歴史家たちを招いて駒場で開いたシンポジウムに参加して、彼らの作った共通歴史教材に関わる苦心談を聞いたのが最初で、次にはスロヴェニアのリュブリャナ訪問団に加わって、ヴォドピヴェッツ先生を初めとするスロヴェニアの学者たちと我々双方の間で、国境を越えた歴史対話の経験を交換発表したのである。

私はリュブリャナが気に入った。同道した夫人の理子さんや優秀なお弟子さんたち、麻布高校の鳥越泰彦さんらと、東欧料理を楽しみながら、歴史問題に限らず、東欧研究の楽しさや苦心を聞いた。空いた時間にリュブリャナのこぢんまりした街や公園を散策するのも楽しく、二度目・三度目の会議の前には、柴さんに勧められたブレド湖やボヒン湖に滞在して、仕事と散策を楽しんだ。逆にスロヴェニアの先生方も二度・三度東京にお招きし、駒場や城西大学、跡見女子大で会議した。スロヴェニアの

先生方は彼らの経験が東アジアでの歴史対話の参考となるのではないかと期待し、熱心に議論に応じてくれた。再度訪問した時には西方のカルスト地方に案内していただいたが、ある院生がイタリアのトリエステを見たいと言い出すと、即座に全員を車で連れて行ってくださった。イタリアとは未だに国境問題を抱えていると聞いたが、国境自体は難なく通過した。また、三度目には東方に連れて行ってくださった。アドリア海からポーランドやルーマニアに向かう高速道路がスロヴェニアに少なからぬお金を落としてくれると聞き、歩きながらスロヴェニアとオーストリアの国境を出たり入ったりしたことは、EUの意味を直観する得がたい経験となった。この共同研究の成果は2018年に共同論文集として刊行されているⁱ。

こうしたすべては互いの信頼感が育たないとできない。それは柴さんの人柄と努力がなかったら不可能だっただろう。その努力のせいも、彼のお弟子さんたちはみな優秀で、人柄もよい。残念なのは、彼らがその才と実績に見合った教職を得ていないことだ。彼も苦しただろうが、私も何の助力もできなかった。申し訳なく思っている。ただ、学問はマラソンだ、衣鉢を継ぎ、何とか続けてほしい。彼はきっと、今も天国からあの温かい眼で彼らを見守っているに違いない。

ⁱ Zarko Lazarevic, Nobuhiro Shiba, and Kenta Suzuki, eds., *The 20th Century through Historiographies and Textbooks: Chapters from Japan, East Asia, Slovenia and Southeast Europe*, Institut za novejšo zgodovino, 2018.